



JSPS London NEWSLETTER

No.77
2024 Winter



A serious exchange of Q&A took place during the 30th Anniversary at the Ashmolean Museum by Hisako Suzuki (Keio University)

Contents

JSPS London 30周年記念特別号/JSPS London 30th Anniversary Special Issue

- | | |
|---|--|
| 1 センター長の英国観望
第14回「今後の展望」(1) | 24 初代副センター長、岩佐公使インタビュー |
| 5 巻頭特集/ JSPS London 創立30周年記念行事 | 28 元ロンドンセンター長、平松幸三氏のインタビュー |
| 9 オックスフォード大学のウェブサイトより
by Prof. Peter Norreys | 32 Events organised/supported by JSPS London |
| 10 ロンドン研究連絡センター創立30周年の軌跡 | 33 JSPS Fellowship Programmes &
International Collaborations Application Schedule |

センター長の英国観望

第14回 今後の展望 (1)

ロンドン研究連絡センター・センター長
小林 直人



1. はじめに - スコットランド、「卓越性と多様性」

9月に続いて12月5日(木)にエディンバラにあるエディンバラ王立協会(RSE; Royal Society of Edinburgh)でJSPSロンドン研究連絡センター創立30周年およびJSPS英国・アイルランド同窓会創立20周年記念行事を開催しました。今回の行事は特にRSE副会長のモナ・シディッキ教授を始めとするRSEの方々の全面的なご支援により、50人以上の出席者のもと無事に終ることが出来ました。関係者の皆様に心から感謝致します。

また前日の12月4日(水)には同窓会スコットランド地域代表のミランダ・アンダーソン博士を中心に企画されたシンポジウム「Fission-Fusion Perspectives and Complex Issues」が開催され、日本からも5名の方々が参加されて多彩な議論が行われました。これらの詳細は次のニュースレターでご紹介します。

さてスコットランドと日本の関係といえば明治初期から教育、技術、文化、医療等の分野で深い関係があったことは有名です。たとえばグラスゴー大学(創立1451年)で工学を学び、日本政府の招聘により1873~1882年に日本に滞在したヘンリー・ダイアーは、工部大学校(後の東京大学工学部)の校長として日本の近代工学教育に尽くし多くのエンジニアを育てました。

一方、彼に学んで工部大学校を卒業した後、グラスゴー大学

渡邊嘉一という人物がいます。彼はエディンバラの北のフォース湾に架けられたカンチレバー方式のフォース橋(世界遺産)の設計に参画し、現場監督としても働きました。この橋の立案者の二人の技術者が橋の原理を示した写真がありますが、その真ん中に彼は写っています。2007年にスコットランドで発行されたフォース橋を図柄にした20ポンド紙幣の裏面の右上の数字の向こうに、その写真が見えます(下記写真参照)[1]。

スコットランドでは、グラスゴー大学と並んでエディンバラ大学(創立1583年)が有名ですが、明治期の日本から多くの医師が留学しました。エディンバラ大学の医学部は当時すでに世界的に評価が高く、日本の近代医学の発展にも大きく寄与した訳です。このように日本とは近代化以来関係が強いスコットランドですが、現在でも多くの日本人研究者が滞在しています。

これまでJSPSロンドンはシンポジウム開催、事業説明会、共同研究などで日本とスコットランドの連携を支援してきましたが、今後は特にスコットランドの「卓越性と多様性」に注目して、特徴のある支援活動を行っていききたいと思います。

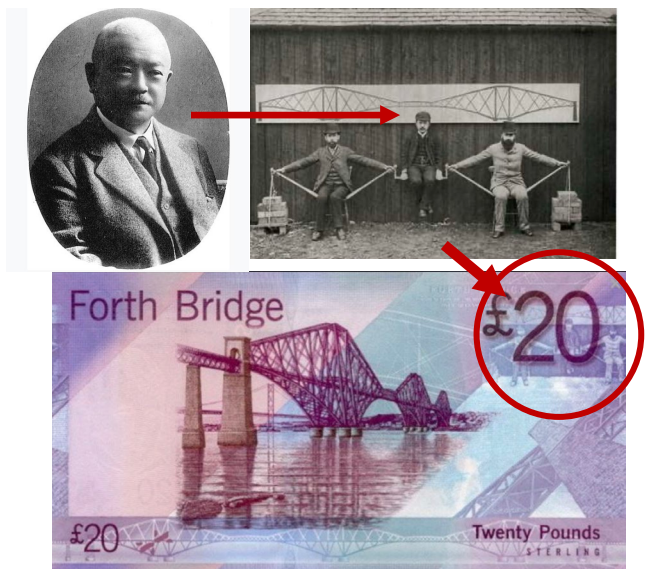


図1. エディンバラ王立協会での記念行事の写真。

図2. (左上)渡邊嘉一氏、(右上)橋の原理を示す写真。
(下)2007年発行のスコットランドの20ポンド紙幣。

センター長の英国観望

2. ノーベル賞の話題

今年のノーベル物理学賞および化学賞はAIを利用した研究に与えられ大きな話題になりましたが、どちらも英国出身の研究者が大きな貢献をしたので今回注目をしてみました。物理学賞は「人工ニューラルネットワークによる機械学習を可能にする基礎的な発見と発明」という功績によりジョン・ホップフィールド博士とジェフリー・ヒントン博士に与えられました[2]。この成果が物理学の範疇なのかどうかは議論のあるところですが、今最も重要なツールであるAI（特に生成AI）の根幹をなす成果に与えられたことは、ノーベル委員会の新たな見識を示すものでしょう。

ホップフィールド博士は人間の神経回路を模倣した「人工ニューラルネットワーク」を使って、画像やパターンを再構成できる手法を開発しました。一方、ヒントン博士は現在当たり前に使われている深層学習のアルゴリズムを開発して、AIによる複雑なパターン認識やデータ解析を可能にする基礎を作ったことで有名です。2012年頃に「AIが猫を認識出来るか」という問題に対してヒントン博士のチームが開発した「AlexNet」というモデルが大きな貢献をしたという記事を読んだことがあります。私のような門外漢でも彼の名前を知っているほど有名な研究者でした。

彼は現在カナダのトロント大学の名誉教授ですが、もともとは英国出身で、1947年にイギリスのウィンブルドンで生まれました。70年にケンブリッジ大学で実験心理学の学士号、78年にエディンバラ大学で人工知能の博士号をそれぞれ取得し、サセックス大学、カーネギーメロン大学(米国)等を経て、87年にトロント大学に移りました[3]。私が昔所属していた電子技術総合研究所でもAIの研究が盛んでしたが、1980年代後半～1990年代前半はAIの「第2次冬の時代」と言われて研究者は大変でした。それを終わらせたのはヒントン博士らによる深層学習の手法だと言われています。ノーベル賞に相応しい成果だったと言えます。



図3. 左:ジェフリー・ヒントン博士。右:デミス・ハサビス博士(左)とジョン・ジャンパー博士(右)[2]

一方、ノーベル化学賞は「計算によるタンパク質設計」という功績でデビッド・ベイカー博士に、「タンパク質構造予測」という功績でデミス・ハサビス博士とジョン・ジャンパー博士に共同で授与されました[2]。ここでもAIが大きな役割を果たしました。ベイカー博士はロゼッタという計算手法を開発し、タンパク質の三次元構造予測から新たなタンパク質の設計を可能にしました。またハサビス博士とジャンパー博士は、Google DeepMind社で開発されたAlphaFoldというAIシステムの主要な開発者で、さらに発展したAlphaFold2により、タンパク質のアミノ酸配列から三次元構造を高精度にかつ高効率に予測することを可能にしました。

Google DeepMind社の前身DeepMind社は、2016年に深層学習で強化されたAIであるAlphaGoを生み出した会社ですが、このAlphaGoが2016年に世界トップ級のプロ棋士を破ったことで一躍有名になりました。ハサビス博士は、DeepMindの共同設立(2010年)者の一人で正にAlphaGoの主要開発者でした。AlphaGoの成功は、それまで研究者の研究対象でしかなかったAIを一気に「使えるツール」に押し上げることになりました。

彼は1976年にイギリス・ロンドンで生まれ、幼少期からチェスの神童として知られ、13歳で国際チェスマスターの称号を獲得しました。ケンブリッジ大学でコンピュータサイエンスを専攻し、ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン(UCL)で神経科学の博士号を取得しました。彼のチームはAlphaFoldの開発に取り組みましたが、それに決定的な進展をもたらしたのが、ジャンパー博士と言われています。彼は米国出身でシカゴ大学で理論物理学の博士号を取得後、2017年頃にGoogle DeepMind社に入りました[2]。

ヒントン博士のAlexNet、ハサビス博士のAlphaGoは、社会に正にAIによるイノベーションをもたらしましたが、今回の二つのノーベル賞は、新たに科学研究におけるAIの大きな威力を示すことになりました。このことは、AIにより今後の科学研究の様相が大きく変わることが予測される大きなインパクトとなりました。

センター長の英国観望

3. 英国の学術研究政策の話題

ボリス・ジョンソン氏が首相の時に首席科学顧問を務め、Covid-19パンデミックの際には首相の隣でTVにもよく出ていたヴァランス卿という人がいますが、彼は今年の7月に労働党政権の科学閣外大臣に就任しました。

彼は最近の貴族院科学技術委員会で、「英国は知識ベースの経済に「大きく依存」しており、研究者が行う「好奇心に基づく基礎科学」を保護し、成長させなければならない。それは究極的には、将来あらゆる経済的、社会的利益を生み出す金の卵を産むガチョウとなる仕事だ」と語ったと報道されています。さらに「好奇心に基づく研究は、25年から30年後に重要になるかもしれない問題に関係しているため、資金提供すべきものであり、「使命」など政府が現在優先したい分野とは別である。」と述べたと伝えられています[4]。ヴァランス卿は元々は医師、科学者であり、ロンドン大学教授を務めるとともに世界的な製薬会社グラクソ・スミスクライン(GSK)の研究開発部門長を務めたこともあります。このように研究者出身である、科学閣外大臣の発言は大きな意味があると言えます。特に日本学術振興会が支援する「好奇心に基づく基礎科学」の重要性に言及されたことは、我々としても大いに歓迎したいと思います。



図4 ヴァランス卿

一方、英国政府は毎年春にRedBookと呼ばれるBudget Report(予算報告書)を発表しますが、本年7月に政権に就いた労働党政権は10月末にAutumn Statement(秋季予算声明)というRed Bookを発表しました[5]。予算項目は多岐にわたっていますが、その中のイノベーションの項目では、学術研究およびイノベーションに関する予算の概要が示されています。表1にその主な項目と予算を示しますが、2025～2026年度には科学基盤にはかつてない程の高額の予算を確保し、その中で中核研究にも61億ポンド(約1.2兆円)の予算を投入するとしています。また政府は10年間の予算を通じて主要な研究開発活動に安定性と長期的な確実性を提供し、産業界との長期的な連携環境を整えるとしています。

また2023年に始まったイノベーション・アクセラレーター・プログラムを2025～2026年度まで延長し、高い潜在的イノベーション・クラスター強化を継続するとしています。これには現在26のプロジェクトが走っていますが、その代表例を表2に示します[6]。

学術研究界は労働党政権が誕生して以来、どのような学術政

策を提出するかに注目してきましたが、この予算案では概ね学術研究に対して好意的な結果が出たと判断しているようです。例えばUKRI(UK Research and Innovation)の最高責任者のオットリン・レイザー教授は今回の予算案に対して、「我々は、政府が持続可能な経済成長、雇用創出、英国全土の公共サービス向上などにおける研究とイノベーションの重要な役割を認識し、本日の予算案で研究とイノベーションに引き続き注力していることを示したことを歓迎します。」との見解を示しました[7]。他の学術団体にも概ね好評だったとのこと。

ただ幾つかの課題も残っています。特に英国の研究者がEUのホライゾン・プログラムに参加できなかった時(2021～2023年)に、このプログラムにアクセス出来なかった研究者のための特別枠の補償金が、今回は通常予算の範囲内になり、その分他の予算に影響が出るのではないかと懸念が出ています。

また英国政府が2022年12月に発表した国際科学パートナーシップ基金(ISPF)は英国と日本などEU以外の国との連携を進める基金として2025年まで予算が決まっていますが、その後の方針は決まっていないようです。この基金によって王立協会を始めとする研究助成機関の日英の研究協力予算も増えていたもので、今後どうなるのかその動きに注目すべきでしょう。

項目	予算(2025～2026年)
科学基盤への投資	204億ポンド(約4兆円)
中核研究の支援	61億ポンド(約1.2兆円)
新たな研究開発プログラム	2,500万ポンド(約50億円)
国立医療研究機関への予算	20億ポンド(約4000億円)の一部
スピニアウト/概念実証資金	4,000万ポンド(約80億円)(5年間)

表1. Red Book で示されたイノベーションに関する項目と予算。

地域	内容と目標
グラスゴー都市圏	持続可能なエネルギーソリューションの開発 目標: 再生可能エネルギーの効率的な利用とエネルギー貯蔵技術の革新
グレーター・マンチェスター	スマートシティ技術の実装 目標: 都市インフラにIT技術を導入し、交通渋滞の緩和や公共サービスの効率化を図る。
西ミッドランズ(バーミンガム市等)	先進的な製造技術の研究 目標: AIやロボティクスを活用した次世代の製造プロセスを開発し、地域の製造業の競争力を強化。

表2. イノベーション・アクセラレーター・プログラムで実施されている3地域の代表的プロジェクトの例。

センター長の英国観望

4. 欧州センター長意見交換会

JSPSの欧州4センターではCovid-19パンデミックが終わった2022年から、持ち回りで欧州センター長意見交換会を開催して来ましたが、2022年秋にはストラスブール・センターで、2023年秋にはストックホルム・センターで開催し、今年は10月25日にロンドン・センターで開催しました。

欧州各センターは数ヶ月に一度程度、特定のテーマに関してオンラインで意見交換を行っていますが、このセンター長意見交換会ではそれとは異なり、直接意見交換を行うことによって普段あまり聞くことが出来ないお互いのセンターの実情を知ることが出来る特徴があります。今回は、まず各センターの業務の現状や課題、各センタで共通に行っているフェローシップ事業や国際共同研究支援事業の運営に関して情報交換を行いました。特にフェローシップ応募者の審査方法や同窓会への支援方法などについても色々細かい意見交換ができました。

また各センターにおいては、フェローシップ事業に加えて各種のシンポジウムや、大学訪問による事業説明会を実施していますが、これらの実質的な効果を今後どのように考えればよいか、など将来の課題についても意見交換を行いました。

意見交換会終了後は、ロンドン・センターの近くのユニバーシティ・カレッジ・ロンドン(UCL)の伊藤博文ら5人が1863年にUCLに留学した記念である「長州ファイブ記念碑」[8]を訪ねました。次いでその近くのウェルカム・コレクションを訪問しました。同コレクションについてはニュースレター69号で当時の国際協力員の全さんが詳しく紹介していますが[9]、チャリティー団体であるウェルカム財団が所有する博物館および図書館として、科学、医学、芸術、人間の歴史に関するテーマを探究する場として運

営されています。今回は英国出身のデジタル・アーティストのジェイソン・ウィルシャー＝ミルズの“Jason and the Adventure of 254”という特別展示(写真下)が行われていて、大変興味深いものでした。

なお、その後の懇親会でもさらに色々な意見交換を行うことが出来て、全体として大変有益な会合となりました。

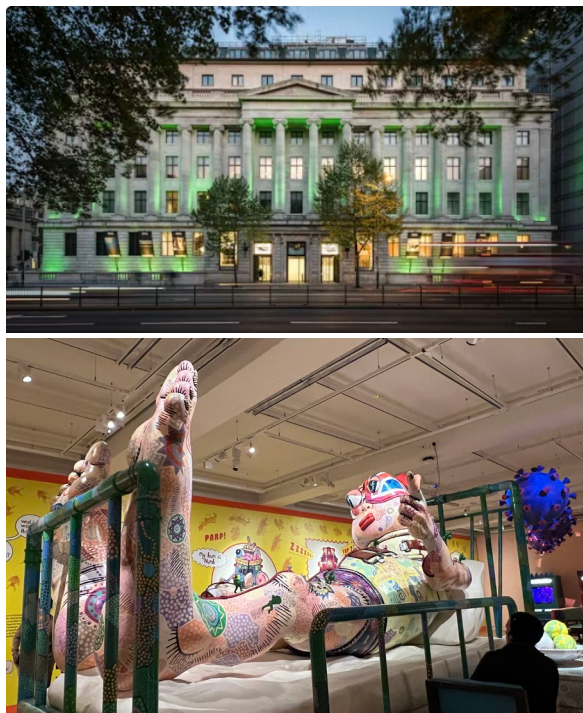


図6. ウェルカム・コレクションの外観(上)とジェイソン・ウィルシャー＝ミルズ氏の展示(下)。

参考文献

- [1] https://www.gla.ac.uk/news/archiveofnews/2007/october/headline_46640_en.html
- [2] <https://www.nobelprize.org/all-nobel-prizes-2024/>
- [3] https://www.palatoinsight.com/2022/03/02/hinton/?utm_source=chatgpt.com
- [4] <https://www.timeshighereducation.com/news/curiosity-driven-research-goose-lays-golden-egg>
- [5] https://assets.publishing.service.gov.uk/media/672232d010b0d582ee8c4905/Autumn_Budget_2024__web_accessible_.pdf
- [6] https://www.ukri.org/what-we-do/browse-our-areas-of-investment-and-support/innovation-accelerator-programme/?utm_source=chatgpt.com
- [7] <https://www.researchprofessionalnews.com/rr-news-uk-politics-2024-10-reeves-pledge-to-protect-core-r-d-funding-leaves-questions/>
- [8] https://www.jsps.org/newsletter/JSPSNL_65.pdf#page=5
- [9] https://www.jsps.org/newsletter/JSPSNL_69.pdf#page=22



図5. 意見交換会の様子。

巻頭記事： JSPSロンドン研究連絡センター創立30周年記念式典をJSPS英国・アイルランド同窓会創立20周年記念行事とあわせて開催

創立30周年行事

JSPSロンドン研究連絡センターは1994年に創立され2024年で30周年を迎えました。またJSPS英国・アイルランド同窓会は2004年に創立され20周年を迎えました。今回その両者を記念してロンドンおよびオックスフォードで記念行事が行われましたので以下でその概略をご紹介します。

1. 9月3日 JSPS創立記念有識者交流会

2024年9月3日の夕刻には The Royal Societyにおいて、「JSPS創立記念有識者交流会」が開催され、The Royal SocietyのSir Mark Walportや在英日本国大使館川上恭一郎公使を始め、日英の研究助成機関、大学、関係機関の方々20名のご出席を頂きました。

冒頭の本会水本哲弥理事からの「JSPSロンドンセンターおよび同窓会と英国の関係機関との緊密な協力は、日英間の国際的な研究協力の発展に大きく貢献してきました。長年温かいご支援を頂いた皆様とこの時間を過ごせることを嬉しく思います。」とのご挨拶を皮切りに、Sir Mark Walportから「英国王立協会とJSPSは“Curiosity-driven”の研究支援というコミットメントを長年にわたって共有し、JSPSロンドンセンターと同窓会の創立はその協力関係において重要な一歩であり、これからも欠かせない日英の重要な架け橋です。」との、また川上公使からは「今年は日英科学技術協力協定も締結30周年という節目の年です。JSPSロンドンセンターには、350年以上の素晴らしい歴史を持つ英国王立協会のように、日英の研究協力を今後も推進して頂きたい」との、お祝いと激励のお言葉を頂きました。

小林直人センター長によるロンドンセンターの概略紹介と乾杯ののち、UKRI/AHRC（UK Research and Innovation/Arts and Humanities Research Council）のProf. Christopher Smithからは日本との研究協力について「国際共同研究の難しさと重要性は共通の価値観を基盤としながら異なる文化や研究アプローチを学び合うことができる点にあり、日本はハイブリオリティの研究・イノベーションパートナーです。」との力強いメッセージを頂きました。

また長年英国の大学に滞在されて日本との共同研究にも貢献されたImperial College Londonの高田正雄教授からは「私が在英中の20年で日英の学術交流は本当に進歩しました。今後国境を越えたファンディングスキームの構築など、研究者の意欲をさらに高める方策に取り組んで頂きたい

。」との、またUniversity College Londonの大沼信一教授からは「日本の発展の陰には伊藤博文がUCLで経験したような英国での学びがあります。双方の若手研究者を互いに支援する日英の日英の協力関係はこれからも重要です。」と、ご所属やご経験ならではの視点からお話を頂きました。

最後にAMS（Academy of Medical Sciences）のProf. George Griffinからは「医学アカデミーが臨床医学と学術医学を共に推進してきたように、日英の全ての関係機関が協力して学生や研究者に機会を提供できれば、日英だけでなく世界の学術研究に大きく貢献できます。」という示唆に富むお話を頂きました。

この会は短時間ではありましたが、JSPSロンドンセンターが培ってきた英国の研究助成機関や大学との連携の成果を確認するとともに、今後の益々の発展について皆様から色々な示唆や激励を頂くことが出来て、大変有益なイベントとなりました。



写真1.
 (左上) 水本哲弥理事
 (右上) Sir Mark Walport
 (左中) 川上恭一郎公使
 (右中) Prof. Christopher Smith
 (左下) Prof. George Griffin

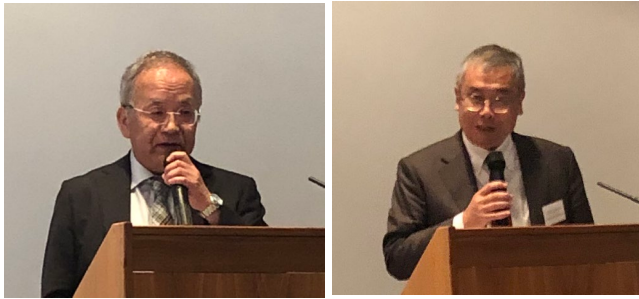


写真2. (左上)高田正雄教授、(右上)大沼信一教授
(下)交流会後の集合写真

JSPS London Office 30th Anniversary Celebrations Networking Event

3rd September, 2024

Introduction and speeches 18:30 -18:50

Opening remarks by Prof Tetsuya Mizumoto, JSPS
Speech by Sir Mark Walport, The Royal Society
Speech by Minister Kyoichiro Kawakami, Embassy of Japan
Explanation of History by Prof Naoto Kobayashi, JSPS London

Speeches 18:45 -18:55

“UKRI-JSPS partnership”
by Prof Christopher Smith, UKRI/AHRC
“UK-Japan Education & Research Collaboration”
by Prof Masao Takata, Imperial College London

Speeches 19:20 -19:30

“History of UCL Japan Collaboration”
by Prof Shinichi Ohnuma, University College London
“AMS-JSPS partnership”
by Prof George Griffin Academy of Medical Sciences

Closing remarks by Prof Mizumoto 20:00

12月3日のプログラム

2. 9月4日 JSPSロンドン研究連絡センター創立30周年記念式典 およびJSPS英国・アイルランド同窓会創立20周年記念行事

9月4日には、オックスフォード大学のAshmolean Museum（以下、アシュモレアン博物館）において、JSPSロンドン研究連絡センター創立30周年およびJSPS英国・アイルランド同窓会創立20周年を祝した記念式典を開催しました。この式典には、日英両国の研究助成機関、英国のナショナルアカデミーや大学の関係者、在英日本国大使館、同窓会メンバー、在英日本人研究者ならびにJSPS本部とロンドンセンター関係者約100名の参加がありました。



アシュモレアン博物館

式典では、本会水本哲弥理事、The Royal SocietyのForeign SecretaryのProfessor Alison Noble、在英日本国大使館川上恭一郎公使からそれぞれ開会のご挨拶を頂きました。Prof. NobleはこれまでのJSPSとの協働の歩みを紹介しつつ、結びには「日英の両組織と学術コミュニティの繁栄のみならず、21世紀の世界的な課題の解決にもつながるよう努めていきたい。」と力強いご意見を表明されました。

続いて、小林直人センター長からJSPS Londonの30年間の軌跡と今後の更なる発展を期するプレゼンテーションや、JSPS UK & ROI Alumni ChairのProfessor Andrew Quantockから同窓会活動の20年を振り返る講演がありました。その後、同窓会員であるOxford大学のProf. Peter Norreysからは「プラズマ物理学の新境地に向けた英国と日本の協力」という講演を、また同大学のProf. Ekaterina Hertogからは「デジタル社会学における日英協力」をテーマに、無給労働への変革である AI技術を駆使したスマート家事の実現に関する共同研究の成果例について講演をして頂きました。また人文科学・社会科学の分野を代表して、同大学日産研究所のProf. Roger Goodmanからは「人文社会科学における日英協力」をテーマに講演をして頂きました。

JSPS London Office 30th Anniversary Celebrations**JSPS UK & ROI Alumni Association 20th Anniversary Celebrations****4th September, 2024****Welcoming Remarks****12:30 - 12:55**

Prof Tetsuya Mizumoto, Executive Director, JSPS
 Prof Alison Noble, Foreign Secretary, the Royal Society
 Minister Kyoichiro Kawakami, Embassy of Japan in the UK

Celebration Remarks**12:55 - 13:05**

Prof Naoto Kobayashi, Director, JSPS London
 Prof Andrew Quantock, Chair, Alumni Association

Lecture "Plasma Physics"**13:05 - 13:20**

Prof Peter Norreys, University of Oxford (JSPS Alumnus)

Special Remarks**14:05 - 14:15**

Prof Roger Goodman, University of Oxford

Lecture "Digital Sociology"**14:15 - 14:30**

Prof Ekaterina Hertog, University of Oxford (JSPS Alumna)

Panel Discussion "The Importance of UK -Japan Academic Collaboration and Future Directions "**14:30 - 15:05****Talk "Ashmolean Museum's link with Japan"****15:25 - 15:35**

Dr Clare Pollard, Curator, the Ashmolean Museum

Alumni Award Ceremony**15:35 - 15:55****Closing Remarks Prof Naoto Kobayashi****15:55 - 16:00**

12月4日のプログラム

式典後半には、日英有識者が「日英の学術研究協力の重要性とその将来」のテーマについて、パネルディスカッションを行いました。この中で「国際研究協力のベネフィット」については、「異なる経歴を持つチームや研究者が一緒に取り組むことで補完的な研究の進展が期待できる」などの意見が、「国際研究協力で特に必要なこと」については、「密に連携することと持続性」や「地球規模の課題に取り組むこと」などの意見がありました。

またJSPS Bridge FellowshipやSymposium Schemeを通じて中・長期的に両国間の連携に貢献された研究者をJSPS同窓会メンバーによるAlumni Awardとして、Prof. Ekaterina Hertog、Dr. Chris Pearson、Dr. Henrik Stotz、Dr. Mohammed Ismailを選出し、表彰式を行いました。



小林直人センター長



Prof. Andrew Quantock



水本哲弥理事



Prof. Alison Noble



Prof. Peter Norreys



Prof. Ekaterina Hertog



川上恭一郎公使



Prof. Roger Gookman



パネル・ディスカッションの様子



Alumni Award 表彰式



会場の様子



Pre-Departureセミナーに出席したフェローの方々



式典終了後の集合写真

3. 秋のPre-Departure Seminarを併せて開催

なお創立30周年と20周年記念式典に先立ち、9月4日午前にはこの秋から日本に渡航するフェローを対象に、Pre-Departure Seminarが開催されました。本セミナーは、JSPSのフェローシップ事業を最大限に活用できるように、日本での研究・日常生活に関する情報提供を行うことを目的に、例年春・秋の年2回開催しているものです。今回は小林センター長の開会挨拶から始まり、妙見副センター長による渡航に向けた準備に関する説明、西田明日香国際協力員による本会の事業説明を行いました。また、先輩フェローのDr. Chris Pearsonnによる経験談の講演があり、The Japan Foundation London (国際交流基金ロンドン日本文化センター) から講師を迎えて、日本語講座を行いました。参加した約20名のフェローたちは、熱心に耳を傾けていました。

オックスフォード大学物理学科の ウェブサイトに掲載された 創立30周年記念行事の記事

Newsletter from JSPS London | No77

オックスフォード大学のウェブサイトより



Celebrating the Japan Society for the Promotion of Science

Professor Peter Norreys helped to mark 30 years since the opening of the **Japan Society for the Promotion of Science** (JSPS) London office by delivering the keynote speech at a celebratory event. Some 100 invited attendees came to the Ashmolean Museum in Oxford on 4 September 2024 for the event that also marked 20 years of the JSPS Alumni Association.

Professor Norreys' speech was entitled 'The UK-Japan collaboration for new frontier in plasma physics'; he went on to participate in a panel discussion considering 'the importance of Japan-UK academic cooperation and future directions'.

JSPS works to foster young researchers, promote international scientific cooperation, award Grants-in-Aid for Scientific Research, support scientific cooperation between the academic community and industry, and collect and distribute information on scientific research activities.

The event was well received and Director of JSPS London Naoto Kobayashi confirmed that he is keen to 'further strengthen the activities of JSPS London.'

Professor Norreys commented: 'I was delighted to see so many alumni and dignitaries in the audience in the Ashmolean Museum, which is testimony to the enduring ties between our two nations, ones that have been greatly facilitated by the JSPS over the past 30 years. We are exploring a possible academic exchange programme in fusion energy research as a fruitful outcome of this 30th anniversary meeting.'

(<https://www.physics.ox.ac.uk/news/celebrating-japan-society-promotion-science>)

【抄訳】

ピーター・ノーリーズ教授は、2024年9月4日に行われた日本学術振興会（JSPS）ロンドン事務所創立30周年記念イベントで基調講演を行いました。オックスフォードのアシュモレアン博物館で行われたこのイベントは、JSPS同窓会設立20周年を記念するものでもあり、招待客約100名が集まりました。このイベントは大変好評で、JSPSロンドンの小林直人所長は「JSPSロンドンの活動をさらに強化したい」と意欲を見せました。ノーリーズ教授は次のようにコメントしました。「アシュモレアン博物館に集まった聴衆の中に、これほど多くの卒業生や要人がいたことを嬉しく思います。これは、両国間の永続的な絆の証であり、この絆は過去30年間JSPSによって大いに促進されてきました。私たちは、この30周年記念行事の実りある成果として、核融合エネルギー研究における学術交流プログラムの可能性を検討しています。」

ロンドン研究連絡センター 創立30周年の軌跡(I)

[1]. 概要

日本学術振興会ロンドン研究連絡センター（以下ロンドン・センター）は1994年にロンドンで設立され、2024年に創立30周年を迎えました。またJSPSのフェローシップ制度等を利用して日本で研究をした研究者の会JSPS英国・アイルランド同窓会（以下同窓会）も同年創立20周年を迎えました。これらを記念して9月4日（水）にはオックスフォードのアシュモレアン博物館で、また12月5日（木）にはエディンバラの王立エディンバラ協会で両者の記念行事が行われました。これを機会に、本稿ではこれまでのロンドン・センターおよび同窓会の30年の軌跡を振り返ってみます。

まず表1にロンドン・センターの創立以来の概略の歴史を示します。

年	月	事項
1994年	12月	創立（翌年ロンドン・メイフェアで事業開始）
1995年	10月	オックスフォード大学と共催シンポジウム「Science and Society」
1999年	9月	王立協会等と共催シンポジウム「Engineering in Japan」
2004年	6月	ロンドン・センター創立10周年記念式典 英国・アイルランド同窓会第1回総会（王立協会にて）
2006年	2月	第1回 在英日本人研究者の会（JBUK）会合
	6月	第1回 プレ・デパーチャ・セミナー
	11月	慶應義塾大学ロンドンオフィス開設（ロンドン・センター内）
2007年	10月	事務所移転（メイフェアからユーストン・スクウェアへ）
2008年	2月	日英学長会議（JSPS、ブリティッシュ・カウンセル共催）
2010年	6月	王立協会創立350周年記念式典
	8月	第1回シンポジウム・スキーム採択審査
2012年	11月	JSPS創立80周年記念式典（在英国日本大使館にて）
2014年	11月	ロンドン・センター創立20周年記念式典 英国・アイルランド同窓会創立10周年祈念式典 （ロンドン・自然史博物館にて）
2018年	3月	エディンバラ王立協会と合意書署名および共同シンポジウム開催
2020年	3月～8月	Covid 19パンデミックのためロンドン・センター・オフィス閉鎖
2024年	9月 12月	ロンドン・センター創立30周年記念式典 英国・アイルランド同窓会創立20周年祈念式典 （オックスフォード・アシュモレアン博物館（9月）およびエディンバラの王立エディンバラ協会（12月）にて）

表1. ロンドン・センターの概史

	氏名	任期	前職
1	柳田 博明	1995.2-1996.1	東京大学
2	白木 靖寛	1996.3-1997.3	東京大学
3	木下 健	1997.5-1999.4	東京大学
4	佐藤 國雄	1999.5-2002.12	文部省
5	金口 恭久	2003.1-2005.4	大学評価・学位授与機構
6	小山内 優	2005.5-2007.3	文部科学省
7	古川 佑子	2007.4-2010.4	大学評価・学位授与機構
8	平松 幸三	2010.5-2014.4	京都大学
9	竹安 邦夫	2014.5-2016.4	京都大学
10	上野 信雄	2016.5-2021.4	千葉大学
11	小林 直人	2021.5-2025.4	早稲田大学

表2. 歴代のロンドン・センター長

またロンドンセンターの歴代のセンター長を表2に写真を図2に示しますが、初代の柳田センター長から現在的小林直人センター長まで11名が執務されました。また副センター長は初代の岩佐公昭氏(文部省)から現在の妙見由美子氏(駐日英国大使館)まで14名、国際協力員は初代の小西成氏(東京工業大学)から現在の宮浦由衣氏(東京科学大学)まで56名が在籍しました。現在はセンター長(1名)、副センター長(1名)、国際協力員(1名)、現地雇用職員(2名)で活動を行っています。なお同事務所には慶應義塾大学のリエゾン・オフィスがあり職員(1名)が滞在しています。



図1. 上段左より、柳田博明氏、白木靖寛氏、木下 健氏、金口恭久氏、小山内優氏、
下段左より、古川佑子氏、平松幸三氏、竹安邦夫氏、上野信雄氏、小林直人氏

ロンドン・センターの事務所は創立時にはロンドンのメイフェア地区に置かれてましたが2007年10月に現在のユーストン地区(14 Stephenson Way, London, NW1 2HD, UK)に移転しました(下記地図参照)。主要業務は日本と英国、アイルランド、オランダ、ベルギー、EUとの学術交流・連携の促進ですが、具体的には、(1)海外の学術振興機関および大学等との連携、(2)海外におけるJSPS事業(シンポジウム開催、共同研究事業の推進、外国人特別研究員の推薦等)の実施、(3)我が国大学等の海外活動展開の協力・支援、(4)在英研究者ネットワーク構築とフォローアップ (5)同窓会活動の支援、(6)日本の学術研究情報の発信、(7)海外学術情報の収集・分析、などです。



図2. 現在のロンドン・センター周辺の地図（センターは赤い印）。

[2] シンポジウム

ロンドン・センターの主要な活動の一つにシンポジウムの開催があります。これはJSPSロンドンが独自の企画と費用で開催するものもあれば、王立協会(the Royal Society)など英国の研究助成機関または大学などと共催で行うものもあります。なお、2010年からは同窓会員や在英日本人研究者から応募を募って毎年4件程度のシンポジウム(シンポジウム・スキーム)を開催して来ました。

ここではその中で主要なものをご紹介します。

(1) 創立初期(1995年)～10周年(2004年)まで

大規模な共催シンポジウムがほぼ毎年開催されました。特に1995年10月にオックスフォードで開催された大規模シンポジウム“Science and Society”は、2日間にわたり数百名規模の参加者があったそうで、JSPS始まって以来の参加人数でした。また2003年1月に行われたオックスフォード大学との共催の「イオンチャネル、トランスポーター、細胞興奮性」と題する大規模シンポジウムでは、英国と日本の研究機関のトップクラスの科学者8名が最新の研究を発表し、約100名の参加者を集めました。

表3にほぼ毎年開催されたシンポジウムの内容を示します[1]。王立協会等との共催が一件見られますが、それ以外では特にオックスフォード大学との開催が多いのが特色です。初期には同大との結びつきが非常に強かったことが分かります。またシンポジウム内容も生命科学や材料科学だけでなく、科学と社会、大学における研究のあり方等に関するシンポジウムも開催されています。

開催日	共催相手	シンポジウム題目
1995年10月19-20日	オックスフォード大学	Science and Society
1996年10月17-18日	バーミンガム大学	Cooperation Between Academia and Industry
1998年4月15-16日	ケンブリッジ大学	Research for Next Generation
1999年9月27日	王立協会、 王立工学学術院、工学物理科学 研究会議 (EPSRC)	Engineering in Japan
2000年12月1-2日	バブラム研究所	Intracellular Signalling
2001年12月3日	オックスフォード大学	Nuclear reprogramming and cell differentiation of stem cells in vertebrates
2003年1月10日	オックスフォード大学	Ion Channels and Transporters
2003年3月24-25日	オックスフォード大学	Nano-materials Seminar
2003年7月25-27日	シェフィールド大学	Beyond Globalization in Japan and Asia: A Multilevel Approach
2004年9月10-11日	グラスゴー大学	Governing university research: Historical and comparative perspectives

表3. 1995～2004年に開催されたシンポジウム

[[10周年(2004年)～20周年(2014年)まで

2010年から、それまでJSPSロンドン・センターが主体となって企画・開催したシンポジウムに加えて、同窓会員および在英研究者を対象にシンポジウム・スキームの企画を公募して採択し、毎年4件程度のシンポジウムを開催するようになりました。これにより各地の大学でも主体的多彩なシンポジウムが開かれるようになりました。これらのシンポジウムには、ロンドン・センターからセンター長以下スタッフが参加して、シンポジウム開催と同時に事業説明会を開くのが通例でした。

1. JSPSロンドン・UCL共催の大規模シンポジウム「Cognition and Action」

2005年9月8-9日 UCLと共催の大規模シンポジウム「Cognition and Action」が、ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン(UCL)のKennedy Lecture Theatreで開催されました[2]。このシンポジウムは脳研究に焦点をあて、入来篤史教授(理化学研究所／東京医科歯科大学)及び Roger Lemon 教授(UCL・神経科学研究所)をチェアとし、日本側から6名、英国側から9名の研究者を招いて講演が行われました。当日はロンドン市内だけでなくオックスフォード、ケンブリッジなど英国各地から参加者が集まり、その数は150名にも上りました。



図2. 左:入来篤史教授、中: Roger Lemon 教授、右: 会場の様子

2. JSPSロンドン、UCL、慶應義塾大学共催 シンポジウム「神経科学の最先端～先端医学研究の進歩とその利用～」

2007年4月27日に、UCL、慶應義塾大学創立150年記念国際シンポジウム”Frontiers of Neuroscience: major advancements in medical research and their applications”が開催されました[3]。このシンポジウムは、慶應義塾大学ロンドンオフィスが中心となり、JSPSロンドン・センター、UCLの3者共催シンポジウムとして企画されました。当日は、安西祐一郎塾長とリチャード・フラコヴィアックUCL副学長の開会の挨拶に始まり、両大学において神経科学分野の最先端の研究を行う科学者により、日常生活にかかわる脳傷害・疾病の治療に関わる研究成果の発表が行われました。



図3. 左: 安西祐一郎塾長(左) とリチャード・フラコヴィアック副学長(右)。

3. ケンブリッジ大学との共催シンポジウム“International Smart Infrastructure Symposium”

2011年11月12-13日にJSPSロンドン・センターとケンブリッジ大学との共催シンポジウム“International Smart Infrastructure Symposium”が開催されました。英国側は同大学の曾我健一教授、日本側は東京大学の藤野陽三教授がオーガナイザーとなり、両国のスマートインフラの研究の連携を構築すること、センサーやデータ管理において新技術を利用したビジネスの機会を探ることを目的として開催されました。当日は社会基盤、電気工学、交通工学等の分野の日英の研究者、企業関係者など全部で80名を超える参加者がありました。



図4. 左：シンポジウム参加者、右：曾我健一教授

4. 高峰譲吉－日英交流130周年記念グラスゴー大学 化学シンポジウム

2013年9月5-6日に、タカジアスターゼで有名な高峰譲吉がグラスゴー大学に留学してから130周年に当たることを記念して同大学でシンポジウムが開催されました[5]。有機化学、生物化学、医薬品化学を中心とした内容で、期間中は日英のみならずドイツやフランスから世界クラスの研究者や業界の代表者も参加して、遺伝生化学やDNA研究等に関わる発表が行われ、両日とも100名以上の参加がありました。本シンポジウムはJSPSロンドンのシンポジウム・スキームで採択されたものです。



図5. 左：鈴木啓介教授（東京工業大学）の講演、右：日本側講演者

[3] 20周年(2014年)～30周年(2024年)まで

大学との共催シンポジウムだけではなく、各研究会議(UKRIの前身)、エディンバラ王立協会(RSE)、ロイヤル・ソサエティなど研究助成機関との共催シンポジウムも多く開催されるようになりました。またシンポジウム・スキームは引き続き定期的に開催されました。

5. 工学物理科学研究会議(EPSRC)との共催シンポジウム“Materials Science Pioneered by Structured Lights”

2017年1月6日、工学物理科学研究会議(EPSRC)と日本学術振興会(JSPS)ロンドン事務所が共催するシンポジウム“Materials Science Pioneered by Structured Lights”がロンドンの王立協会で開催され、日本と英国各地の機関から60名を超える参加者が集まりました[6]。このイベントのテーマはオプトエレクトロニクスによる材料研究の進歩であり、講演では物理化学、原子・分子物理学や材料化学の潜在的応用に関する最新の多くの研究成果が発表されました。



図6. 左:参加者の集合写真、右: シンポジウムの様子

6. エディンバラ王立協会－日本学術振興会 スコットランド-日本共同シンポジウム

2018年5月3日、「未来を照らす有機オプトエレクトロニクス」というシンポジウムがエディンバラ王立協会(Royal Society of Edinburgh, RSE)で開催され、スコットランド及び日本から約70人が参加しました[7]。テーマは有機オプトエレクトロニクスの研究の進歩で、講演者からは様々な潜在的応用の最新研究成果が紹介されました。また会議に先立ちRSEとJSPS London間の相互協力を強化する合意書の署名が行われました。



図7. 左: 合意書の署名、右: シンポジウム参加者

7. 王立協会(The Royal Society)－日本学術振興会 共同シンポジウム

2018年6月14-15日の2日間にロイヤルソサエティ(王立協会)との共催によるシンポジウムが開催されました[8]。このシンポジウムは、「再生医療(Materials for energy session)」および「エネルギー物質(Regenerative medicine session)」の2分野の平行セッションで構成され、講演者は両分野合わせて22名(日本11名、英国11名)、総参加者は46名でした。参加者が議論に集中するために、ロンドン中心部から鉄道で1時間半のところにあるホテルで行われ、影響力の強いハイレベルな研究者を集め、より強い研究交流に発展させたいという英国側の思いが強く表れていました。



図8. 左：参加者の集合写真、右：シンポジウムの様子

8. 英国－日本 構造生物学シンポジウム

2024年6月18-19日にリバプール大学生命科学棟で「英国－日本 構造生物学シンポジウム」が開催されました[9]。このシンポジウムは、JSPSロンドンがシンポジウム・スキームで支援を行い、構造生物学の最先端の手法の開発と利用に携わる英国と日本の科学者が一堂に会して行われました。また2017年のノーベル化学賞受賞者のリチャード・ヘンダーソン教授が招待され、同教授が共同開発されたクライオ電子顕微の発展について特別講演を行いました。



図9.左：主催者とヘンダーソン教授(中央)、右：ヘンダーソン教授の講演

9. 英国医学アカデミーと共同で政策ワークショップを開催

2024年10月16-17日にJSPSロンドンと英国医学アカデミー(Academy of Medical Sciences)と共同で、“Improving the resilience of health and public health systems to the impact of climate change”と題するワークショップがロンドンで開催され、気候と環境の変化を踏まえて医療と公衆衛生システムの回復力を向上させる方法に焦点を当てた議論が行われました[10]。ワークショップには、英国と日本に拠点を置く40名以上の研究者と関連する政策立案者が参加し、全体討議および分科会において熱心な議論が行われました。



図10.左: 参加者の集合写真、右: 会議の様子

[3] 事業説明会

シンポジウムと並んでロンドン・センターの主要な活動の一つが英国内外の大学におけるJSPSの事業説明会です。2020-2021年のCovid-19パンデミックの時期を除けば年間に平均10以上の大学を訪問し、多い年には30近い大学を訪問していますので、記録が明らかな2004年からでも延べ200回以上の事業説明会を行っています。また前項のシンポジウムの際にもJSPSの事業説明を通常行いますし、2020年のCovid-19パンデミック以降は、オンラインの事業説明会も併せて行っていますので、全部で250回以上は行っていることになります。(2017年11月までのデータは[11]を参照、ただしこれには事業説明会単独開催以外の数も記載されています。)

このうち英国内では、24の研究大学のグループ、いわゆるラッセル・グループ(*)に所属する大学が半分強、それ以外の大学が半分弱となっています。表3には2004~2024年に事業説明会を3回以上開催した大学を示してありますが、全てラッセル・グループの大学であり、場所も北アイルランドを除いて英国のグレートブリテン島の各地を頻繁に訪問していることがわかります。またアイルランド共和国、オランダ、旧ユーゴスロビア諸国、キプロスなど、外国の大学や研究所も約20ヶ所ほど訪問して事業説明会を開催しています。

事業説明会は通常は大学を訪問して、幹部の先生方、各学部・大学院の主要メンバー、大学院生・ポスドクの方々等にそれぞれ事業説明を行い、質問に答えるという形が多いです。以下では、過去の主要な事業説明会の足跡を辿ります。

ロンドン研究連絡センター創立30周年の軌跡(I)

	大学名	場所	回数	期日
1	グラスゴー大学	スコットランド	9	2004.7-2023.3
2	ヨーク大学	イングランド（中部）	7	2008.11-2023.9
3	サウザンプトン大学	イングランド（南部）	6	2010.10-2024.11
4	ニューカッスル大学	イングランド（北東部）	6	2008.10-2024.12
5	エディンバラ大学	スコットランド	4	2006.3-2023.3
6	ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン	ロンドン	4	2006.10-2023.7
7	オックスフォード大学	イングランド（中東部）	4	2006.11-2022.2
8	インペリアル・カレッジ・ロンドン	ロンドン	4	2006.11-2024.9
9	バーミンガム大学	イングランド（中部）	4	2011.10-2023.11
10	マンチェスター大学	イングランド（中部）	4	2010.6-2023.10
11	カーディフ大学	ウェールズ	4	2011.11-2024.2
12	リバプール大学	イングランド（中部）	3	2010.10-2022.7
13	ワーリック大学	イングランド（中部）	3	2010.11-2023.7
14	ダラム大学	イングランド（北東部）	3	2013.6-2024.12

表4. 事業説明会で訪問回数が多かった大学

1.エディンバラ大学で事業説明会を開催

2006年3月2日にスコットランドのエディンバラ大学において、主に若手のポスドク、大学院生を対象に、JSPS事業説明会を開催しました[12]。最初に主に日本での研究機会を提供するフェローシップ制度等について紹介し、その後元JSPSフェローで英国同窓会員のマーティン・キンバリー博士y(副会長、インペリアル・カレッジ・ロンドン)と、イアフ・ヤング博士(エディンバラ大学)により、JSPS外国人特別研究員として2年間日本に滞在した体験談の紹介がありました。英国の大学関係者からは、「日本」と聞くと、研究のレベルが高いということは理解していても、生活についてはどのようなものか想像がつかないという若手研究者が多いという声が聞かれました。



図11. Dr. Martyn Kingsburyの講演、右:会場の様子

2. オックスフォード大学で事業説明会を開催

2008年11月6日にオックスフォード大学において、JSPS の事業説明会を開催しました[13]。フェローシップ事業を中心にしたJSPSの事業説明とともに文部科学省の科学技術・学術の取り組みを説明の後、JSPS同窓会会員、バーバラ・ガブリス博士、ニコラ・デラル博士から日本での体験談、渡航前の注意事項などに関して写真を交えた講演がありました。その後の質疑応答では、ほぼすべての参加者から個別に具体的な質問を受け事業説明の補足を行いました。



図12. 左: バーバラ・ガブリス博士の講演、右: 会場の様子

3. カーディフ大学で事業説明会を開催

2010年1月21日にウェールズのカーディフ大学で事業説明会を開催しました[14]。当日は同窓会員のアンドリュー・クアントック教授の司会進行で進められ、開会挨拶に続いてJSPSロンドンからSPS 全体の事業説明、フェローシップ事業説明を行いました。その後、同窓会員のジェニファー・エドワーズ博士から日本での研究生活についての 体験談あり、クアントック教授、横井博士から日英研究 交流に関する発表がありました。会場には約50名の研究者・学生が集まり、質疑応答も活発に行われました。



図13. 左: ポリー・ワトソン、JSPS国際プログラム・コーディネータによる説明、
右: ジェニファー・エドワーズ博士による講演。

4. オークニー諸島の2大学で事業説明会を開催

2012年6月21日、22日にスコットランドの最北端にあるオークニー諸島の2大学を訪問して事業説明会を開催しました[15]。University of Highlands and Islands Orkney Collegeは北欧学、考古学、農学の3部門のある大学です。Heriot - Watt University Orkney Campusはエディンバラに本部がある同大学の最北端のキャンパスで、再生可能エネルギーを専門に扱う大学院キャンパスです。近隣のオークニー近海で日本企業が海洋エネルギーの実験を行うなど、外資からの注目度も高い大学です。両大学とも事業説明の後、それぞれの大学特有の研究開発内容について意見交換を行いました。



図14. Heriot - Watt University Orkney Campusにて

5. 旧ユーゴスラビアの各国で事業説明会を開催

2013年の2月18～20日には旧ユーゴスラビアの一部だったスロベニアのヨジェフ・ステファン研究所、リュブリャナ大学、ボスニア・ヘルツェゴビナのサラエボ科学技術大学院を訪れて事業説明会を開催しました[16]。リュブリャナ大学は学生数が5万人を越える国立大学で、日本との交流にも積極的な大学です。またスロベニアはJSPSの二国間あるいは多国間の共同研究事業を利用して日本との研究交流を行っています。さらに同年7月8～12日には、クロアチアのリエカ大学、ザグレブ大学、セルビアのベオグラード大学、ヴィンチャ原子核科学研究所、ノヴィ・サド大学を訪問し事業説明会を開催しました[17]。特に100名以上の参加者があったベオグラード大学をはじめ各会場には多くの学生や研究者が集まり、日本との共同研究への関心の高さが伺い知れました。



図15. 左: ベオグラード大学での事業説明会、右: ノヴィ・サド大学での説明会後の質問。

6. 数少ない私立大学でも事業説明会を開催

英国でも数少ない私立大学のうち創立が1976年と最も古くかつ唯一王室憲章(Royal Charter)を有するバッキンガム大学(ロンドン北西部)で、2015年6月18日に事業説明会を開催しました[18]。この大学は訪問当時は2000名弱(現在は3300名)と学生数は少ないですが、教員の数が相対的に多くが学生満足度は常に英国でトップクラスだそうです。また法学、経営学、人文学から医学まで学ぶことが出来るその水準も高いものがあります。このような大学でもJSPSの紹介を行うことは意義深いと思われます。



図16. 緑豊かなバッキンガム大学のキャンパス

7. アイルランドの大学で事業説明会を開催

アイルランドの大学でもシンポジウムに際しての事業説明を含むと全部で8回ほど事業説明会を開催しています。最近では2024年2月にトリニティ・カレッジ・ダブリンとユニバーシティ・カレッジ・ダブリンを訪問してそれぞれ事業報告会を行いました[19]。トリニティ・カレッジ・ダブリンはアイルランド最古の大学で、1592年にエリザベス1世の Royal Charter(王室憲章)による認可を受けて創立された中世から続く伝統大学の一つです。研究中心型の総合大学で世界ランキングでも常に上位に位置しています。またユニバーシティ・カレッジ・ダブリンは1908年に創立されましたが前身の大学を含めると170年以上の歴史があり、現在はアイルランド国立大学 (NUI)の構成大学の一つです。6つのカレッジと38のスクールがあり研究も活発に行われています。両大学とも日本の大学との共同研究に非常に意欲的で、今後も連携の強化が望まれます。

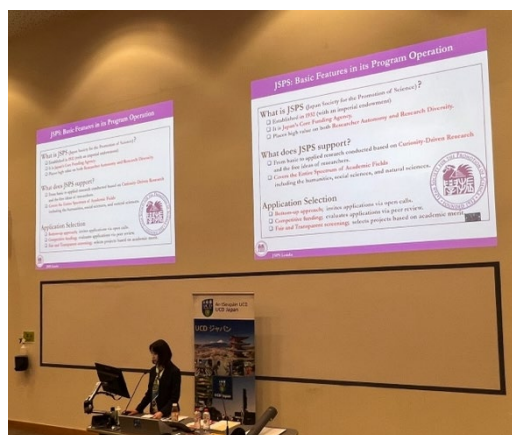


図17. ユニバーシティ・カレッジ・ダブリンでの事業説明会の様子

8.オランダの3大学で事業説明会を開催

オランダもロンドン・センターの担当国であり、現在までに2回ほど訪問して事業説明会を開催しています。1回目は2013年12月にアムステルダム市にあるアムステルダム自由大学とナイメーヘン市にあるラドバウド大学とで事業説明会を開催しました[20]。また2024年9月にはフローニンゲン市にあるフローニンゲン大学とアムステルダム自由大学で事業説明会を開催しました[21]。フローニンゲン大学は、1614年創立のオランダで2番目に古い大学で、11の学部を擁して研究水準も極めて高いものがあります。アムステルダム自由大学の創立は1880年と比較的新しいですが、9つの学部で戦略的研究テーマを推進しています。2024年に両大学を訪問した際には、久しぶりのJSPSの訪問と言うこともあり、また在オランダ日本大使館の支援も受けて今後の日本の大学との交流に非常に期待を持たれていました。



図18. 左：フローニンゲン大学での学長への説明、右：同大学での事業説明会

(*) 1994年に設立された英国の24の研究型国立大学によって構成された団体。北からエディンバラ、グラスゴー、ニューカッスル、ダラム、ヨーク、リーズ、マンチェスター、リバプール、シェフィールド、ノッティンガム、バーミンガム、ウォーリック、ケンブリッジ、オックスフォード、UCL、インペリアル・カレッジ・ロンドン、キングス・カレッジ・ロンドン、ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス、クイーンズ・カレッジ・ロンドン、ブリストル、カーディフ、サウザンプトン、エクセター、クイーンズ・ユニバーシティ・ベルファストの各大学がメンバー。

【参考文献】

- [1] <https://www.jsps.org/event/event.html#wrapper>
- [2] https://www.jsps.org/pdf/newsletter/Newsletter_No6.pdf
- [3] https://www.jsps.org/pdf/newsletter/Newsletter_No13.pdf
- [4] https://www.jsps.org/newsletter/files/JSPS_Newsletter35_Low.pdf
- [5] https://www.jsps.org/newsletter/JSPS_Newsletter38_Low.pdf#page=10
- [6] https://www.jsps.org/newsletter/JSPSNL_51.pdf#page=2
- [7] https://www.jsps.org/newsletter/JSPSNL_56.pdf#page=2
- [8] https://www.jsps.org/newsletter/JSPSNL_57.pdf#page=2
- [9] <https://www.jsps.org/events/2024/04/uk-japan-symposium-on-structural-biology.html>
- [10] <https://www.jsps.org/>
- [11] https://www.jsps.org/newsletter/JSPSNL_54.pdf
- [12] https://www.jsps.org/pdf/newsletter/Newsletter_No8.pdf
- [13] https://www.jsps.org/pdf/newsletter/Newsletter_No15.pdf
- [14] https://www.jsps.org/pdf/newsletter/Newsletter_No28.pdf
- [15] https://www.jsps.org/newsletter/Newsletter_No33.pdf
- [16] https://www.jsps.org/newsletter/files/JSPS_Newsletter36_Low.pdf
- [17] https://www.jsps.org/newsletter/JSPS_Newsletter37_Low.pdf
- [18] https://www.jsps.org/newsletter/JSPSNL_45L.pdf
- [19] https://www.jsps.org/jsps_newsletter/files/JSPSNL_74.pdf#page=6
- [20] https://www.jsps.org/newsletter/JSPS_Newsletter39_Low.pdf#page=10
- [21] https://www.jsps.org/jsps_newsletter/files/newsletter_no76_autumn.pdf#page=2

岩佐敬昭公使（初代ロンドン・副センター長） インタビュー

創立当時に副センター長を務められた在トルコ日本国大使館の岩佐敬昭公使に
創立当時の状況について、本年7月にオンラインでお話をお伺いしました。

岩佐 敬昭公使（略歴）

- 1991年 文部科学省入省、高等教育、文化、スポーツ、科学技術などの業務に従事。
- 1995年～1997年 日本学術振興会（JSPS）ロンドン副所長
- 2001年～2003年 日本学術振興会ストックホルム副所長
- 2003年～2006年 在中国日本国大使館一等書記官
- 2013年～2014年 文部科学省 文化庁 日本語課長
- 2014年～2015年 国連大学（UNU）大学院学位・研修プログラム事務局長
- 2015年 - 2017年 日本学術振興会 常務理事
- 2017年 - 2020年 沖縄科学技術大学院大学（OIST）副学長
- 2021年 在トルコ日本国大使館 公使



1. ロンドン研究連絡センターが1994年に設立となった経緯はどのようなものでしょうか？

JSPS海外研究連絡センターの1拠点目のナイロビ・ステーション（1965年設置）や2拠点目のカイロ・ステーション（1984年設置）は、研究連絡センターというよりも、地域研究を行う研究者が公募で選ばれ、自らの研究を進めるための拠点という要素が大きかったと思います。バンコク・ステーション（1989年設置）も当初はその流れで設置されました。その後、ワシントン（1990年設置）やボン（1991年設置）の研究連絡センターが設立され、次に6番目の拠点として1994年にロンドン・センターが、英国における学術研究交流の拠点として検討されていたと考えています。

先進国型としてはワシントン、ボンに次いでロンドンは3拠点目ですが、予算折衝等との兼ね合いで1994年度に開設されることになったと聞いています。まず私が副センター長として1994年12月にロンドンに着任し、翌年2月に柳田博明センター長がいらっしやいました。センターのオープニングセレモニーは1995年3月に実施しました。

1994年の11月のある日上司から「今度ロンドンに行ってくれないか」と言われ、「わかりました」と答えたものの、「いつからどこに行くのですか？」と尋ねると、「1週間後に行ってほしい、期間は2年間の

予定だ」と言われ驚いたことをよく覚えています。引越その他手続きも必要ですから、1週間ではさすがに準備が間に合わないの、「もう少し時間を頂けませんか？」と言って、何とか1ヶ月の猶予をいただき12月に着任したというのが経緯です。

柳田博明初代センター長はまだ東大先端研の現役の教授でしたから、国内でのお仕事があり、実際にロンドンにいらっしやっていたいただいたのは1995年になってからでした。その前にも柳田先生には、ロンドンから電話やファックスで頻繁に連絡を取り、親身になってご指導いただきました。

2. センター長、事務所、スタッフ、その他創立当時の色々な課題があったと思いますが、どのように対処されましたか？

柳田先生がセンター長ということは、私の着任前から決まっていました。出発前にご挨拶をさせていただきましたが、とにかく前向きな方という印象で、ロンドンで一緒に仕事をさせていただくのが待ち遠しくなりました。

ロンドン・センターの事務所の予定地は、現在のオフィスとは異なりメイフェアでした。私が赴任した時には、契約前なのでまだ入居できる状況ではありません。出発前にJSPSに行って「到着後、どこで仕事をしたら良いのでしょうか」聞いたところ、「事務所はこれからあなたが行ってから契約をまとめて下さい。」と

のこと。それでも暫定であってもオフィスは必要と思い重ねて尋ねると、「心配しなくて大丈夫。神戸製鋼ロンドン支店の方に話をつけてあるので、神戸製鋼ロンドン支店にとりあえず行ってください。事務所は神戸製鋼から借りることになっています。」と言われて、そういうものかなと思いつつ出発しました。契約書の交渉が完了するまでの着任後3ヶ月ぐらいは神戸製鋼に毎日通っていました。なんと0番目のJSPSロンドンの事務所は、神戸製鋼ロンドン支店内だったわけです！その期間中は、神戸製鋼は私にデスクを準備してくれた他、電話やファックスも使わせていただきました。何よりもありがたかったのは、右も左もわからない私に、神戸製鋼の方々が手取り足取り教えてくれたことです。もしも新しい何もないオフィスにただ1人ポツンと放り出されていたら、何をしてもいいから困っていたでしょう。例えばどこでデスクやキャビネットを買ったらいいか、コンピュータやファックスの購入やサポートをどうすればよいのか(おいしいレストランやパブの情報も！)、など私の初心者的な質問にも神戸製鋼の方々が丁寧に答えて下さったので、快適かつ効率的に開所準備を進めることができました。

事務所契約の基本的条件、例えば家賃や賃貸期間などは神戸製鋼との間でA4で1枚の合意書があったので、あとは弁護士が細部を詰めて、すぐにJSPS理事長が神戸製鋼の方とサインをしてめでたしめでたしと思いきや、それは大間違いでした。英国の法律では不動産の賃貸契約のために双方が弁護士を立てることになっていて、彼らが法的な様々な観点から侃々諤々議論を繰り広げたのです。後になって考えると、当時弁護士報酬の上限を決めていなかったこともあり、プロの弁護士からすれば後々問題が生じないように徹底的に頑張ってくれたのだと思います。そうこうしているうちに開所式の日も迫ってくるし、早期の契約署名を優先してほしいと私から話しても、さらに細かな協議が続きました。それでも何とか100枚は優に超える分量の契約書の件も解決し、開所式の日には事務所のお披露目もすることができてうれしかったです。



創立当時にロンドン・センターのあった
ロンドン・メイフェアの建物の外観と入り口

3. 今我々が使ってる調度品などは、そのとき揃えて頂いたのですね。

そうですね。当時、色々な方に聞いたりカタログを見ながら選んで、私が所長の机と什器などを選びました(事務所には私しかいませんから。)。今まで30年使い続けていただいているということは、英国製品の品質が優れているからだと思っています。他にも、調度品、家具など、本部と予算の相談をしながら必要なあらゆるものを購入しました。

事務所の配置は、細長いオフィスの端にセンター長室、反対側の端に会議室、それをつなぐ形で事務スペースがありました。現地採用スタッフが所長室近くに座り、真ん中のキッチンやトイレのスペースを挟んで私が座っていました。部屋の面積は覚えていませんが、3人で執務するには十分なスペースでした。唯一の欠点は、私が現地職員の方と話そうと思っても遠くにいますので、毎回駆けて行かなければならぬことくらいです。



現在のロンドン・センターの建物、入り口と銘板

当時は国際協力員の制度がまだありませんでした。現地職員募集のため科学雑誌や現地の新聞などに広告を出したところ、ものすごい数の人が応募して来たので書類でスクリーニングし、その後面接をして決めました。最初はオーストラリア出身のとても元気な方が来てくれました。日本にも住んでいたことがあって日本語が上手な人でしたが、1年ぐらいで転職しました。次に来てくれたのはスコットランド出身の方で、落ち着いた勉強熱心な方でした。



現在のロンドン・センターの所長室

お二人とも優秀かつ日本語堪能で、ロンドン・センターの初期の業務を進めることができたのはお二人の力によるところが大きかったと思います。私の任期中に柳田先生はお帰りになり、2代目の所長としてやはり東京大学先端研から白木先生にいらっしゃっていただきました。

4. 開所式はどういう状況でしたか？

ロンドンに赴任して最初のミッションは、1995年3月までに開所式を実施することでした。開所式の予算計上の関係で、赴任した年度内に実施する必要があったのだと理解しています。12月に赴任しましたから、3ヶ月以上あり準備期間に余裕があると思っていましたが、それは大間違いでした。事務所の賃貸契約、諸々の物品の購入、現地職員の募集などと並行して、右も左も分からないロンドンで開所式の準備を進めなければならず、実際には綱渡りの状況でした。

開所式の準備としてまず決めなければならないのは、会場をどこにするかでした。先に開所したJSPSの海外センターの前例を調べるとホテルで開催していましたから、ロンドン・センターについても、当初は市内のホテルで開催する方向で検討を始めました。そんなある日、神戸製鋼の方から「イギリスでは博物館や美術館でイベントを実施することが頻繁に行われている。」と伺いました。博物館等の側からすると、資金獲得の必要があったのだと思います。いくつかの博物館や美術館と交渉し下見を繰り返した結果、サウス・ケンジントンにある科学博物館が有力な候補と考えるようになりました。ロンドン・センターからの距離が近く、何より日英間の学術交流を目指すというセンターの目的と親和性があると考えたからです。大英博物館と比べると、半額程度の額で会場を借りることができるという事情もありました。

柳田所長に「JSPSには開所式を博物館で実施した前例はありませんが、科学博物館はどうでしょうか？」と尋ねると、「それは面白い。そうしましょう！」と即答いただきました。私は当時20代でしたが、それまでの役所の仕事では何かをしようとすると上司から前例を問われました。しかし柳田所長は日頃から、前例がないからこそ面白い、実施する価値があるというスタンスの方でしたから、前向きな提案をして断られたことは一度もありません。ロンドンでは自由に仕事をさせていただき、それによってその後の仕事にもつながる基本的な態度を育成していただいたことに感謝しています。

科学博物館での開所式では、大崎仁JSPS理事長の挨拶を皮切りに、王立協会(Royal Society)会長のマイケル・アティヤー卿、ケネス・エドワード英国大学協会(UUKI)会長、長谷川正明文部省審議官、藤井宏昭駐英大使にお言葉をいただきました。その後、柳田所長からの謝辞と抱負の後、神戸製鋼の顧問でもあったジェフリー・アレン卿の乾杯の音頭で、産業革命期の巨大な蒸気機関をバックに約150人の日英の学術・科学技術関係者、日英交流関係者の間での交流が始まりました。事務的には準備段階で、博物館で開催するよりもホテルで実施した方が無難ではないかという声もありましたが、参加者から「素晴らしい会場、素晴らしい開所式！」「思い出に残る開所式でした。」との声が相次ぎ、苦労した甲斐があったと疲れが吹き飛びました。

5. 当初想定されていた業務内容はどのようなものでしょうか？

他のセンターも同様かと思いますが、カウンターパートである対応機関、各地の大学や研究機関に所長と

一緒に出向いて、JSPSのフェローシップや日英間の共同研究・セミナーの紹介を積極的に行いました。また、柳田所長の主導で大規模なシンポジウムを実施しました。第1回は「Science and Society」というテーマでオックスフォード大学で開催し、シンポジウムの概要はオックスフォード大学の出版社から発行されています。数百名規模の聴衆を集めての大規模なシンポジウムは、それまで各センターで実施していませんでしたが、柳田所長の「英国では新参者のJSPSが旗揚げするにあたって、インパクトのあることを実施したい」との思いから実施したものです。各分野の日本の著名な研究者をスピーカーとしてたしか8名ほどお呼びし、2日間の日程で実施しました。英国の方々からは、日本の各分野の最先端の研究動向を直に聞くことができ良かったという声が寄せられました。

また、日本に留学生として渡航したいという声も多かったため、在英国日本大使館と連携して、各地の大学で、学部留学、研究留学、研究交流のどのステージにも対応できる形での説明会も何度か実施して好評でした。なにぶん当時のロンドン・センターにはセンター長と現地職員と私の3人しかいませんでしたので、現在のようにより多くのスタッフがいればもっと色々なことができたのではないかと思います。

話は横道に逸れますが、肝を冷やしたエピソードを紹介します。当時はセンター所有の車があり、出張者が来たときには私が運転してヒースロー空港にお迎えに行くことが度々ありました。大崎理事長が出張でいらっしゃった時、空港からホテルに向かう高速道路でタイヤがパンクしてしまいました。予備のタイヤを積んでいましたし、冬タイヤへの交換は自分でしていましたので、直ぐに対処できると思ったのですが、緊張と寒さのせいか思いの外時間がかかってしまい、理事長には別途タクシーを呼んで先にホテルに向かっていたいただきました。後でお目玉をいただくと覚悟しましたが、寛大にもそのようなことはなくホッとしました。

6. 創立時の英国の研究助成機関、大学との関係はいかがでしたか？

自らJSPSのフェローシップ等の紹介をするために大学や研究機関を訪問する以外に、日本から文部省、JSPSその他の独法、大学等から英国に出張者がいらっしゃる際には、意識して同行させていただいていました。それによって人脈が広がると共に、英国の高等教育事情や研究動向を理解することができたと思います。現在のようにオンラインで会議ができる状況にはありませんでしたので、多くの方にお会いできたことはその後仕事をしていく上で大きな財産になりました。

また、王立協会等の対応機関や各大学の国際担当の方々とは、日本との関係を含む国際業務に長年関わっている方が多く、新参者の私たちに多くのことを教えてくれました。ロンドン・オフィスが順調に立ち上がったのは、そのようなご助言の力が大きかったと思います。例えば王立協会では定期的に招待制の講座を実施していますが、国際担当の方の紹介で何回か参加したことがあります。ある回の講座では大学の教授が講演していましたが(たしか、当時猛威を振っていた狂牛病に関する内容でした)、聴衆として来ていた政治家が研究者とがっぷり四つに組んでサイエンスの議論をしていて強い感銘を受けました。

7. JSPS海外研究連絡センターへの期待はどのようなものがありますか？

今トルコにいて思うことは、日本が注目していない国の大学がどんどん力を伸ばしていることです。例えばトルコの大学は上位校でも日本ではあまり注目されているとは言えませんが、THE (Times Higher Education)などの国際的な大学ランキングで日本のトップ10大学と肩を並べる大学が出てきています。トルコの大学がヨーロッパの大学と緊密な関係を築き、研究レベルが向上していることを日本の方にもっと知っていただけることを期待しています。先日、ボンセンターの林センター長がイスタンブールにいらっしゃり、イスタンブール大学とコチ大学を訪問されたので同行させていただきました。トルコは地理的にも人的関係においてもドイツとの関係が深いので、ボンセンターがトルコを担当していただいていると伺い大変心強く思っています。

また、大使館勤務で気が付いたのですが、大使館には外交関係や日本語関係、国費留学生の送り出し等の仕事で培っている大学との広範なネットワークがあります。そのネットワークとJSPSのフェローシップや共同研究等の事業が結びつけば、より深い学術交流が進むのではないかと考えています。

最後になりますが、私がロンドンにいたのは、日本ではバブルははじけたもののその余韻でまだまだ元気な時代でした。当時の藤井大使の「日本は英国から、美しい衰え方を学ばなければならない。英国はモダンなものを取り入れながら発展している。過去の栄光にすがるのでなく、英語という財産を使いながら新しい発展をしている。」という言葉が、大変印象に残っています。英国は美しく衰えるどころか、藤井大使のお言葉どおりにその後新たな発展を遂げ、学術的にも文化的にも大きな存在感を保っています。JSPSロンドン・センターの益々のご発展を心より願っています。

平松幸三元ロンドン・センター長インタビュー



平松幸三元ロンドン・センター長(略歴)

1972年京都大学大学院修士課程修了。同大学工学部衛生工学科助手を経て、92年より武庫川女子大学教授、2003年より京都大学大学院教授、2010年～2014年日本学術振興会ロンドン研究連絡センター長。この間1970年から1年間スウェーデン環境保護庁で、1981年から1年間英国サウサンプトン大学音響振動研究所で研究に従事。専門は環境音響学。特に騒音制御および騒音の影響、サウンドスケープ関連分野の研究。

2024年はJSPSロンドン研究連絡センターの創立30周年に当たりますが、2010年から2014年にセンター長を務められた平松幸三先生に、当時の活動状況について本年8月にオンラインでお話をお伺いしました。

(1) 先生がセンター長の時期に通常行っていた事業はどのようなものでしょうか。新たに始められた事業や、特に力を入れられた事業はあるのでしょうか？

新たに始めたのは、シンポジウムの開催です。年に1回はやりました。シンポジウムというのはこちらでテーマを決めて行います。例えば2010年10月にイースト・アングリア大学において「大学ミュージアム・シンポジウム」を行ったことがあります[1]。そのときはイースト・アングリア大学側はDr. Simon Kanerという人が中心となり、京都大学の博物館を日本側のカウンターパートとしました。また京都大学以外に東京大学や北海道大学等の先生にも来て頂いて、英国側からはオックスフォード大学等からも参加して頂き、お互いに情報交換と議論をしました。

イギリスの大学ミュージアムというのは300年以上の歴史があって、また一つの大学で30以上の博物館やコレクションを持っているところもあります。日本の大学ミュージアムは最近始まったばかりなのでイギリスから学ぶところは多いのですが、逆にケンブリッジ大学やオックスフォード大学のミュージアムは旧態依然としていて、展示物を並べるだけという感じだったのです。これに対してイースト・アングリア大学のミュージアムは、考古学の発掘資料と現代アートと一緒に展示したりして、新しいスタイルを作り出していましたし、日本では特に東京大学が展示方法に新規性があって素晴らしかったですね。京都大学も独自のやり方をやっていますし、そういった工夫はイギリス側には刺激になったかもしれないと思います。



イースト・アングリア大学でのシンポジウム
(2010年10月)

ドイツも大学ミュージアムがあるのですが、ドイツではどちらかというと公共ミュージアムとの連携に力を入れているので、大学が大きなミュージアムをもつという発想は希薄だと言われています。日本の大学もドイツ流だったと思います。日本の大学も様々な資料を持っていまして、例えば京都大学の場合は植物標本が200～300万点あるのですが、保管してある場所が植物学科に所属する建物で、雨漏りするような状態だったので、1990年頃に博物館を建てて標本を保管することにしたという経緯があります。だから京大のミュージアムの場合は植物標本と考古学資料の保管が重要な任務となっています。

もう一つ印象に残るシンポジウムは2012年1月にマンチェスター大学で行った‘Risky engagements: encounters between science, art and public health’というタイトルのシンポジウムです[2,3]。私も共同研究者だったのですが、イギリスの大学の先生が日本で調査研究したものを映像化しましてね。それをコアにしたシンポジウムをやりました。日本側からも5人参加しましたが、イギリス側からも何人かに出て頂きました。公開のシンポジウムでしたから参加者はかなり多かったです。マンチェスター大学はイギリス最大の大学ですね。そのウィットワースという博物館兼ギャラリーがあるのですが、キュレーターが9人いてその他の職員も全部入れると60人ぐらいいるようなすごく大きなミュージアムで、インパクトがあったと思います。

(2) 大学での事業説明会はいかがでしたか？

大学での事業説明会は積極的に行っていました。私が着任した時は事務所に車がありました。車で行けば途中で様々な所に立ち寄ることもできるので、車を活用して多くの大学に行きましたね。一度行くと事業説明会を2ヶ所以上で開催できますので、結果的に回数は増えたと思います。

一つ印象深いのはスカイ島という島がスコットランドの西の端にありますけども、そのサバル・モール・オーステ(Sabhal Mòr Ostaig)というカレッジに行ったことです(2013年9月訪問)。そこはゲイル語で全ての授業をしているところでした。アイルランド、ウェールズ、北米など世界中から学生が来て、たいてい1人は日本人が学んでいるとのことでした。

それともうひとつスコットランドの東北にあるオークニー島のUniversity of the Highlands and Islands Oakneyです(2012年6月に訪問)[4]。本当に小さなカレッジがあるだけですが、考古学を中心にした研究レベルがすごく高く、トップジャーナルに出さない限り自分たちは潰れてしまうという危機感を持っておられました。私たちが行ったときは教員は7人でした。日本の大学もその姿勢には学ぶものがある、と思ったものです。また北アイルランドはベルファスト(2014年1月クイーンズ大学ベルファスト校訪問)に行きました。

アイルランド共和国やオランダやベルギーもロンドン・センターの所掌範囲なので、事業説明に行きました。アイルランド共和国の時はレンタカーを借りてダブリン(2014年1月ユニバーシティ・カレッジ・ダブリン訪問)とゴールウェイなど三つの街を車で移動して、事業説明会を行いました。ユニバーシティ・カレッジ・

ダブリンは考古学が特に重要なのですが、世界のトップレベルの航空学の研究をしているという自負もお持ちでした。

2013年の12月に訪問したオランダのアムステルダムですが、事業説明会でオランダはJSPSロンドンが担当していることを申し上げたのですね[5]。向こうの方もご存知ないわけです。オランダと日本との交流をなぜ日本側が支援してくれるのかと聞かれましたのでJSPSの方針を説明しました。



アムステルダム自由大学での事業説明会
(2013年12月)

(3) 上記の事業を進める上でよかった事、あるいは障害になったことはありましたでしょうか？あるいはこのような事もやっておけば良かったなどという事はありましたでしょうか？

都合の悪いということにはなかったと思います。事業説明会に行った時に、日本から来ている国際協力員の方が先方にインタビューさせて頂いてレポート作成のための資料を頂くなどということがありましたので、それは非常に良かったと思いますね。ロンドン・センターがカバーしている旧ユーゴスラヴィア諸国にも行ったのですけれども、あちらの方々は国際交流というよりは、JSPSが何らかのファンドを自分たちに提供してくれるのかという期待があるのですね。その点少しミスマッチがありました。とにかく自分たちは研究予算がないから、何か予算が欲しいという感じでした。旧ユーゴスラヴィアのスロベニアという小さな国がありますが、ここは日本語の勉強熱がはなはだ盛んなところでした[6]。スロベニアは200万人ぐらいの人口だったと思うのですが、ある大学で学生数が100人～200人もいる日本語学科があって、熱心に日本語を勉強していました。だからそういうところは日本に行きたいという方が相当いるのではないかと思います。

(4) 英国の研究助成機関との関係は活発だったでしょうか？

ロイヤル・ソサエティ(王立協会)とはよく交流していました。定期的に会合も持っていました。イベントがあると案内を頂くので、なるべく顔は出すようにしましたし、こちらのイベントにも案内を出すことで来てくださることがありました。ロイヤル・ソサエティの隣にロイヤル・アカデミー・オブ・エンジニアリング(王立工学アカデミー)がありますし、日本大使館近くにもロイヤル・アカデミー・オブ・ケミストリー(王立化学アカデミー)などがありますね。ロイヤル・ソサエティは2010年6月にちょうど350周年記念式典があり我々も出席しました[7]。JSPSはどちらかというと理系の研究者との交流が多いので人文・社会系の研究が中心のブリティッシュ・アカデミー(英国学士院)にも、もう少し力を入れて交流しても良かったかなと反省はしています。

(5) 同窓会の活動は活発だったでしょうか？

スコットランドには熱心な方がいらっしゃいました。ロンドンにも熱心な方が一人おられたのですが、その方は代わられたようですね。イギリスの人は同窓会を何のためにするかというのがよく分からないようですね。たまたまファンドをもらって日本に行ったというだけで、なぜ集まらないといけないのかと思うようです。これは国民の気質だと思いますけれども。ドイツは同窓会活動が活発でJSPSのオフィスなどとは関係なく独自でやっていて、会費を取ってシンポジウムなどもやっているようですね。



ブリ・デパーチャ・セミナーと同窓会会合
(2013年10月)

しかし、何かの機会に同窓会員同士が知り合いになるのは良いと思います。日本に行く人たちはベクトルの方向が近いところにあると思うのです。だから彼ら自身同士の交流も決して無駄ではないと思います。これに関連して、だれかにアドバイスしても良いという人たちの名前と関心あるいは経験をデータベース化しておくというのは重要だと思いました。

(6) 今後ロンドン・センター(あるいは他の海外研究連絡センターも)として一層力を入れるべき事はどのようなものとお考えでしょうか？

改善点というわけではないのですが、センターが持っている情報、例えば同窓会のデータベースなどは、出しても良い範囲で、希望者がアクセスできるようにするとか、あるいは過去に日本に行ったことのある人、たとえば日本のどこかの大学に行って今はケンブリッジ大学にいたような人にその時のことを聞く事ができると、すごく良いと思います。日本から来る方にとっても、あるいは日本に行きたいと思っている人にとってもですね。どの組織でもそうですが過去の経験を組織として蓄積することが大切だと思います。

また同窓会の組織化をして、もう少し例えばデータベースを有効に使うとか、やることがあると私思います。(今は同窓会のデータベースも整備されてよく活用しています。センター注)もう一つはセンター同士の連絡ももっとあっていいのではないかと思います。ヨーロッパの4センターは割に近いじゃないですか。日本で言えば国内線ぐらいの距離で集まることできるし、それほど負担にならないから、ヨーロッパにあるセンター同士の共通の問題について意見交換できたらよいのではないかと思います。そう思って、本部に提案しましたが、なぜか当時の本部はその必要なし、とのご方針でした。それで私は3センターを個別に訪問して意見交換しました。(今は欧州研究連携センター長意見交換会というのを毎年開催しています。センター注)

(6) その他

繰り返しになりますが、組織として情報をきちんと継承していくために各海外研究連絡センターがこれまでの歴史のアーカイブを作って、それを常に利用できるようにすると良いと思います。

それから私がいる時にJSPSは世界各国の担当センターを決めましたが、ロンドン・センターもオランダ、ベルギーの他、ルーマニア、ブルガリア、旧ユーゴスラヴィアを担当することになりました。そこで私はロンドンにある各国大使館に説明に行きました。各大使館から本国にJSPSの情報を伝えて頂けたと思います。

JSPSは多くのフェローシップを世界中に出しかつ共同研究費を配るなどしていますが、こういう組織は他の国はあまりないですね。例えばイギリスでは研究のためのファンディングを出しますのでかなりハードル高いです。ただフェローシップで人を呼ぶみたいなのはあまりありません。ドイツはフンボルト財団が奨学生を呼ぶ制度はありますが。JSPSは世界中に対してファンドを提供しているので是非それを有効に活用していけば良いと思います。

参考文献

- [1] https://www.jsps.org/newsletter/files/JSPS_Newsletter34_Low.pdf#page=11
- [2] <https://www.jsps.org/news/2012/02/manchester-symposium-5th-to-6th-january-2012.html>
- [3] <https://www.jsps.org/event/documents/120105-06ManchesterProgramme.pdf>
- [4] https://www.jsps.org/newsletter/Newsletter_No33.pdf
- [5] https://www.jsps.org/newsletter/JSPS_Newsletter39_Low.pdf
- [6] https://www.jsps.org/newsletter/files/JSPS_Newsletter36_Low.pdf
- [7] https://www.jsps.org/pdf/newsletter/Newsletter_No25.pdf

■□■ 国際学術交流研修 ■□■

独立行政法人日本学術振興会（JSPS）では、大学等の職員を対象として、国際交流に関する幅広い見識と高度な実務能力を有する専門的な職員の養成を目的とした国際学術交流研修を行っています。受講者は「国際協力員」として、以下のとおり、2年間の研修を受講します。

- JSPS東京本部における国際学術交流の実務研修（1年間）
- JSPS海外研究連絡センターにおける海外実務研修（1年間）

ご興味のある方は是非ご覧ください。<https://www.jsps.go.jp/j-overseas/kenshu.html>

Events organised/supported by JSPS London from July Mid October 2024 to December 2024

- ❑ JSPS- AMS Symposium
@11 Cavendish Square
16th – 17th October 2024
- ❑ JSPS- RSE Symposium : Fission-Fusion Perspectives Complex Issues
@The Royal Society of Edinburgh
4th December 2024
- ❑ JSPS- RSE Celebration Event
@ The Royal Society of Edinburgh
5th December 2024
- ❑ Information Event:
@ University of Southampton (13rd November 2024)
@ Durham University (3rd December 2024)
@ University of Sussex (Online) (3rd December 2024)
@ Newcastle University (6th December 2024)

Future events organised/supported by JSPS London

- Information Event:
@King's College London (23rd January 2025)
@University of Ulster (4th February 2025)
@Queen's University of Belfast (5th February 2025)
@University of Bristol (Online) (12th February 2025)
- Symposium and Seminar
@University College London (21st -25th February 2025)
@University of Manchester (28th February 2025)

JSPS Fellowship Programmes & International Collaborations

Application Schedule for FY2024/2025/2026

Fellowship Programmes

*The Pre/Postdoctoral Short Term programme is also managed by other JSPS overseas offices in Europe and USA independently. For more information, please check their websites.

Programmes	Suitable Applicants	Apply to	Recruitment		2025-												
				Dec	Jan	Feb	Mar	Apr	May	Jun	Jul	Aug	Sep	Oct	Nov	Later	
Summer Programme (LON coll)	Pre/Postdocs	JSPS LON	FY2025							FY2025 Core period: Jun-Aug					TBA		
Pre/Postdoctoral Short term (1-12m)		JSPS TYO	1st Call (FY2026)										TBA			Apr2026-Mar2027	
			2nd Call (FY2025)		10th					Aug2025-Mar2026							
			3rd Call (FY2025)						6th						Dec2025-Mar2026		
		JSPS LON	1st Call (FY2025)		20th		Apr2025-Mar2026										
			2nd Call (FY2025)						TBA						Nov2025-Mar2025		
Postdoctoral Standard (12-24m)	Postdocs	JSPS TYO	1st Call (FY2026)								TBA				Apr2026-Sep2026		
			2nd Call (FY2025)				25th				Sep2025-Nov2025						
		Royal Society	FY2025				TBA				Sep2025-Nov2025						
		British Academy	FY2025	11th				Apr2025-Nov2025									
Invitational: Long Term (2-10m)	Mid Career to Prof level	JSPS TYO	FY2025								TBA				Apr2026-Mar2027		
1st Call (FY2026)								TBA					Apr2026-Mar2027				
2nd Call (FY2025)						25th						Oct2025-Mar2026					
BRIDGE Fellowship	Alumni Members	JSPS LON	FY2025	16th							Jul2025-Mar2026						

Application period or deadline

Fellowship starting time

International Collaborations

*The following schedule is for the researchers on the Japanese side.

Programmes	Suitable Applicants	Apply to	Duration	2024	2025-													
				Dec	Jan	Feb	Mar	Apr	May	Jun	July	Jul	Aug	Sep	Oct	NOV	later	
JSPS London Symposium & Seminar	Alumni & JBUK Members	JSPS LON	Symposium: 1-3 days Seminar: 1 day			10th				Jun2025-Feb2026 (TBA)								
Bilateral Programme [A]	Research Groups	JSPS TYO Royal Society	Joint Project: Max 2 yrs											TBA			TBA	
Bilateral Programme [B]		JSPS TYO	Joint Project: Max 2 yrs												TBA			Apr2026-Mar2028 (MAX)
			Joint Seminar: Max 1 week												TBA			Apr2026-Mar2028 (MAX)
Core to Core Programme	Institutions/ departments	JSPS TYO	Max 5 yrs													TBA		Mar2031 (Max)
JRP-LEAD with UKRI	Universities and reserch institutions	JSPS TYO	3 years										TBA					Nov2025-May2029 (Max)

Application period or deadline

Project starting time

*The Month of deadline may change.

*When you apply to JSPS Tokyo, please note that the application periods and deadline above are for the head of the host institution to submit the applications to JSPS Tokyo. The time frames for host researchers to submit their applications to their institution are normally earlier. Therefore, Fellowship candidates must discuss their preparation schedules with their host researchers. Please also check each website for more details.

Programme Contact Information List

Fellowship Programmes

■ Summer Programme
(London call) [JSPS London](#)

■ Postdoctoral Standard
[JSPS Tokyo](#)
[The Royal Society](#)
[The British Academy](#)

■ Invitational Fellowships
[JSPS Tokyo](#)

■ Pre/Postdoctoral Short Term
[JSPS Tokyo](#) [JSPS London](#)

■ BRIDGE Fellowship
[JSPS London](#)

International Collaborations

■ JSPS London Symposium/Seminar Scheme
[JSPS London](#)

■ Bilateral Programme
[JSPS Tokyo](#)

■ Core to Core Programme
[JSPS Tokyo](#)

■ JSPS International Joint Research Programme
[JSPS Tokyo](#)

今号では、“ぼりーさんの玉手箱”および“山田さんの徒然なるままに”はお休みいたします。
次号78号より通常のNニュースレターの形式に戻ります。

From the next issue, issue 78, we will return to our regular newsletter format.. (published in MAR 2025)

Follow us on ...

- For Japanese researchers in the UK or RoI/ 在英・アイルランド日本人研究者の皆様、ご希望の方に、JSPS London が開催するイベントのご案内やニュースレター等をお届けしています。対象は、英国・アイルランドの大学・研究機関に所属する研究者（ポスドク・大学院生含む）及び在英日系企業研究所の研究者の方々です。下記リンクにてご登録ください。

<https://ssl.jsps.org/members/?page=regist>



- JSPS Tokyo が運営するJSPS Monthly（学振便り）は、JSPS の公募案内や活動報告等を、毎月第1月曜日にお届けするサービスです（日本語のみ／購読無料）。情報提供を希望される方は、下記のリンクにてご登録ください。

<https://www.jsps.go.jp/j-mailmagazine/index.html>



日本学術振興会 ロンドン研究連絡センター (JSPS London)
14 Stephenson Way, London, NW1 2HD, United Kingdom
Tel : +44 (0)20 7255 4660 | Fax : +44 (0)20 7255 4669
E-mail : lon-info@overseas.jsps.go.jp | <https://www.jsps.org>

JSPS London ニュースレター
監 修：小林 直人
編 集 長：妙見 由美子
編 集 担 当：山田 泰子